

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トンにピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2020年は9万8千トンとなりました。

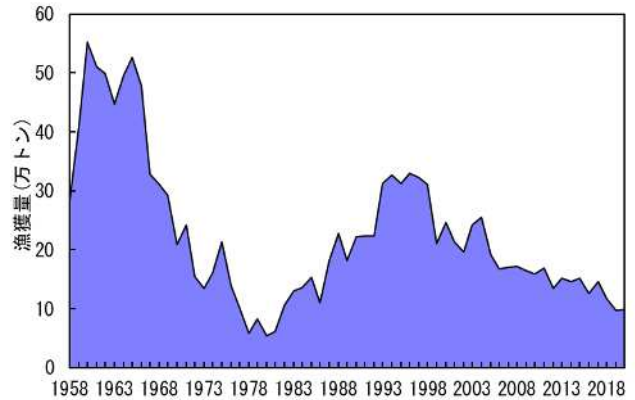


図 全国のマアジ漁獲量の推移

年

2. 県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、7月に甕東、男女群島、串木野沖でマアジ小（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。8、9月に串木野沖でマアジ小、仔（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、7月に立目崎沖でマアジ小（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。9月に開聞沖でマアジ小（1歳魚：2021年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で395トンの水揚げで、前年の153%及び平年の51%でした。

3. 県内の令和4（2022）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆、小（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に漁獲の主体であった0,1歳魚が今後も漁獲の主体となることが予測され、前期における中型まき網の漁模様から、前年を上回り、平年並となると考えられます。

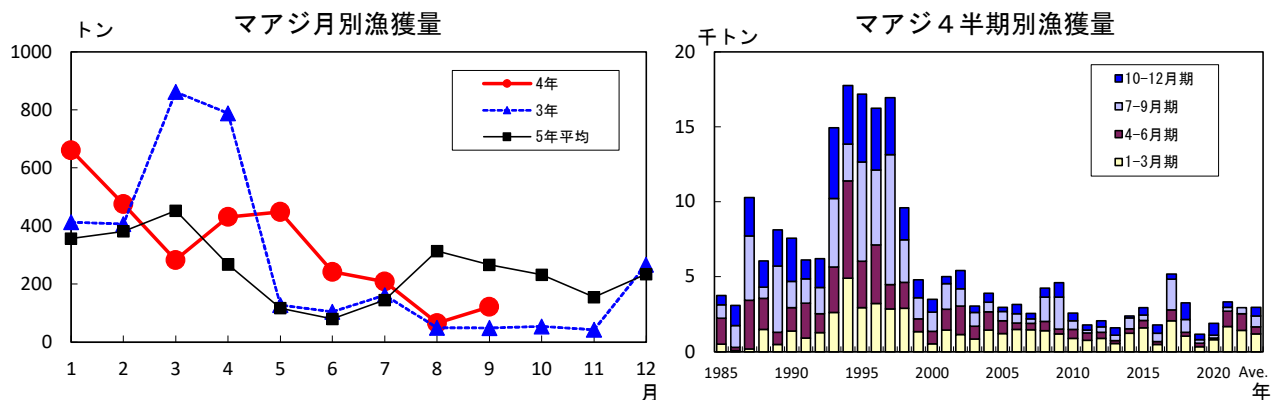


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年9月28日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となり、2020年は39万トンとなりました。

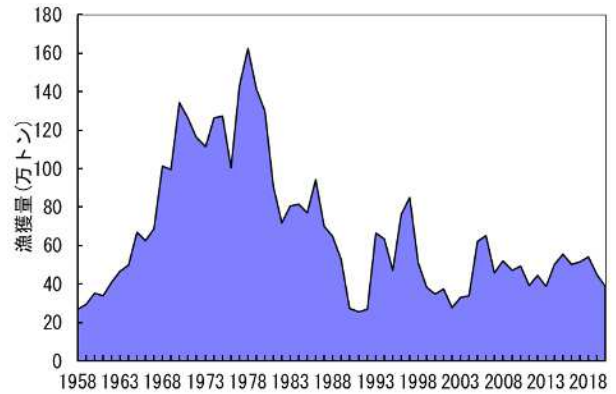


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、8、9月に甑下でゴマサバ豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、7月に馬毛島でゴマサバ中（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）主体の漁場が、8、9月に津倉瀬、鷹島、野間池沖でゴマサバ豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で3,635トンの水揚げで、前年の159%及び平年の102%でした。

3. 県内の令和4（2022）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ豆（0歳魚：2022年生まれ）、ゴマサバ中、中小（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並
（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

期間の前半は前期8、9月に漁獲の主体となっていたゴマサバ豆が、後半はゴマサバ中小・中が漁獲の主体となると考えられます。前期の漁模様を考慮すると、サバ類の来遊量は低調だった前年を上回り平年並となると考えられます。

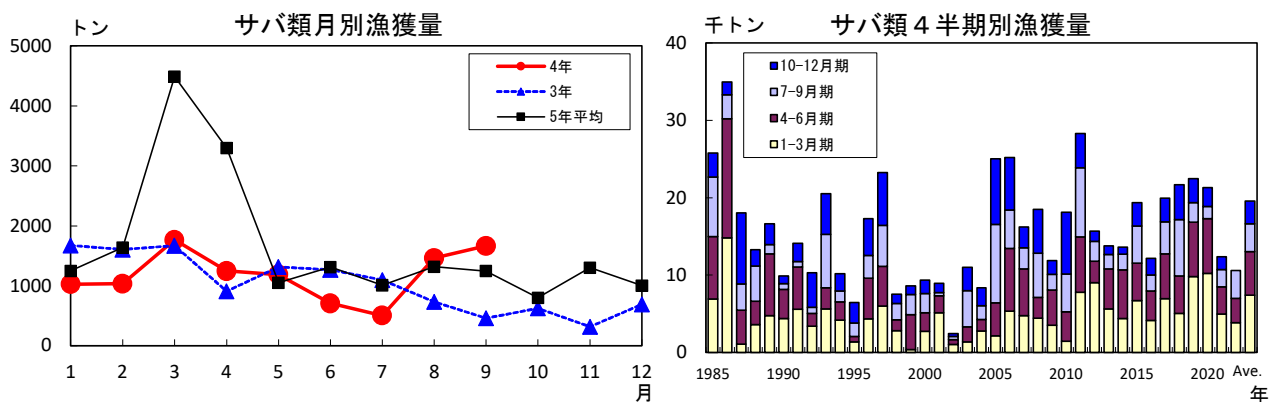


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年9月28日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2020年には70万トンとなりました。

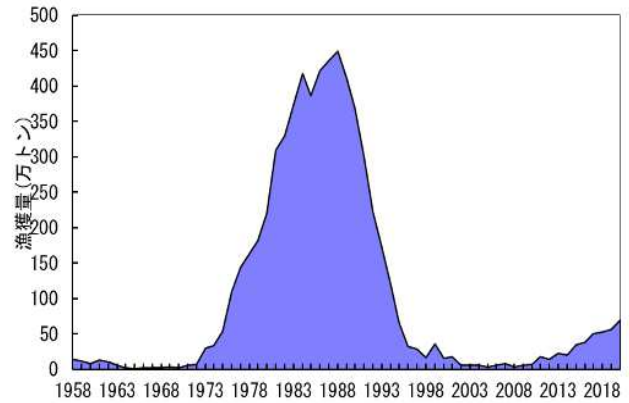


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、9月に天草沖、牛深沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、70トンの水揚げで前年の741％、平年の18％でした。

北薩海域の棒受網では、144トンの水揚げで前年の509％、平年の407％でした。

3. 県内の令和4（2022）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中羽（0歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2022年生まれ）は、9月に北薩海域のまき網・棒受網でまとまった漁獲が見られていることから、今期は前年・平年を上回ると考えられます。

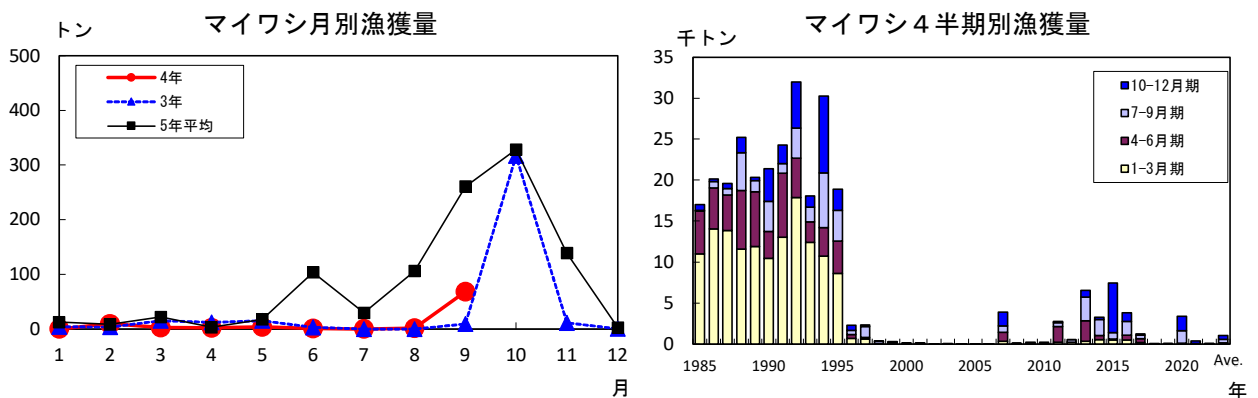


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年9月28日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりましたが、2020年は4万トンと大きく減少しました。

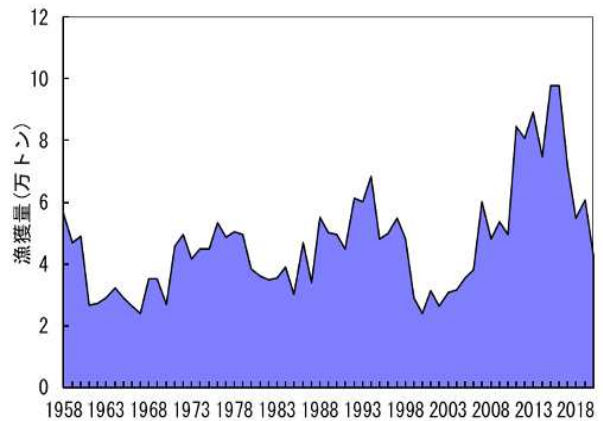


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、8月に甑下、八代海で、9月に甑下、牛深沖、甑西で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、7、8月に野間池沖で、8月に津倉で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（0～2歳魚：2020～2022年生まれ）主体に689トンの水揚げで、前年の300%、平年の64%でした。

北薩海域の棒受網では、969トンの水揚げで、前年の136%、平年の92%でした。

3. 県内の令和4（2022）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽主体（0歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年を上回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2022年生まれ）は、前期の漁況を基に予測すると、今期は前年を上回り、平年並と考えられます。

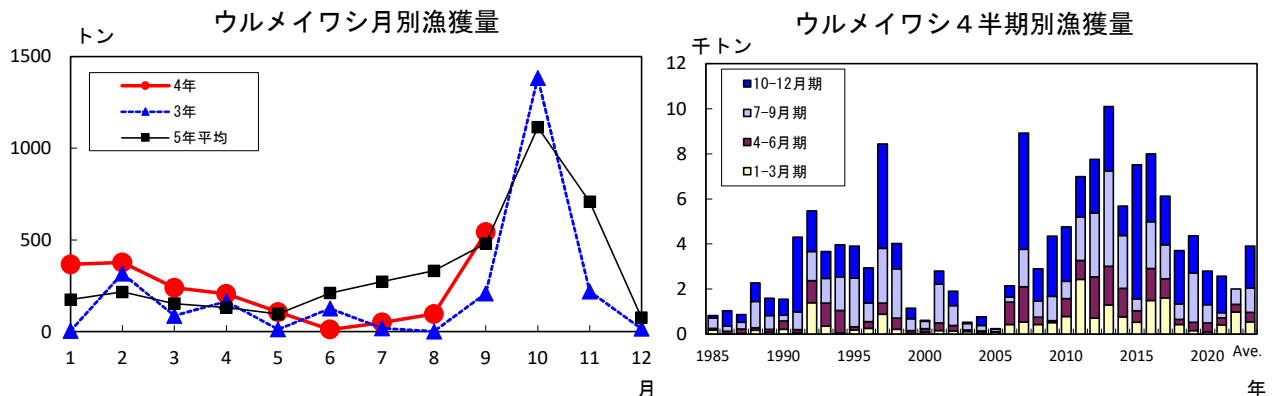


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年9月28日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2020年は14万トンとなりました。

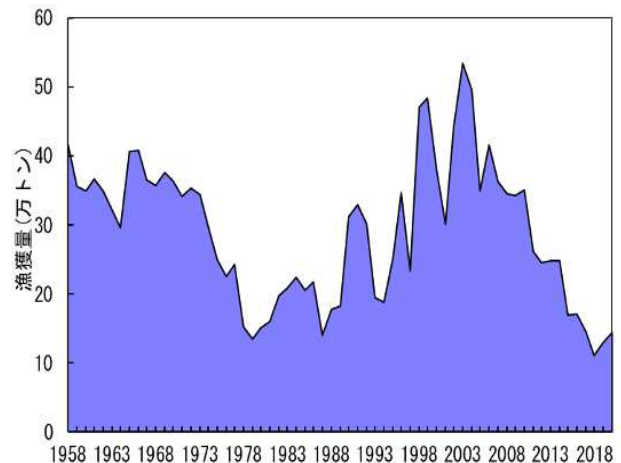


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、7、8月に八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中羽（1歳魚：2021年生まれ）主体に210トンの水揚げで、前年の98%、平年の37%でした。

北薩海域の棒受網では、57トンの水揚げで、前年の145%、平年の38%でした。

3. 県内の令和4（2022）年10～12月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）

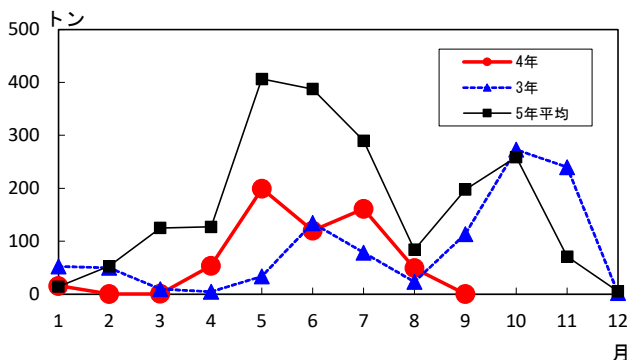
来遊量：前年を下回り、平年並

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる中～大羽（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）の漁獲量は、前期の漁況を基に予測すると、今期は前年を下回り、平年並と考えられます。

カタクチイワシ月別漁獲量



カタクチイワシ4半期別漁獲量

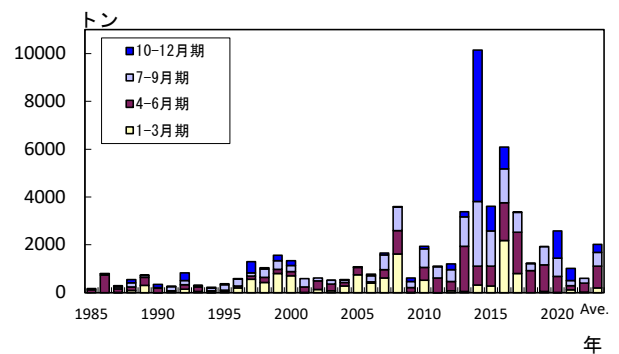
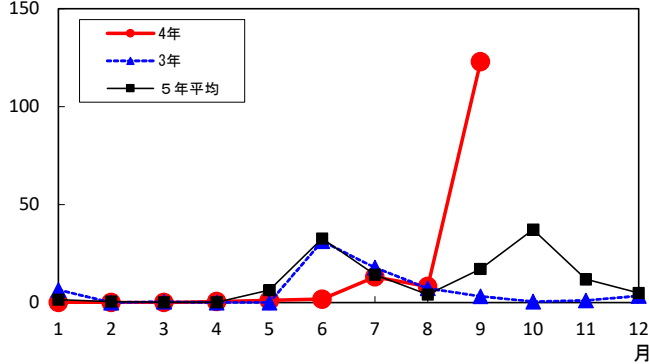


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和4（2022）年9月28日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

トン マイワシ月別漁獲量



百トン マイワシ4半期別漁獲量

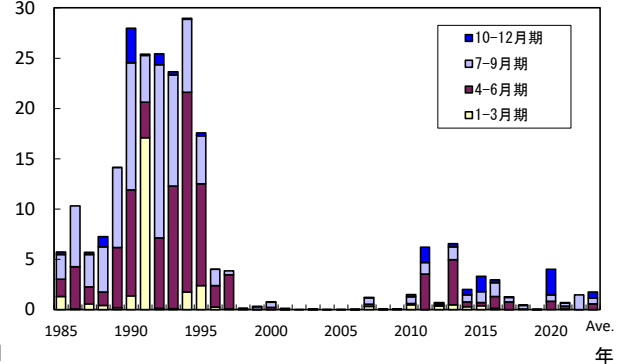
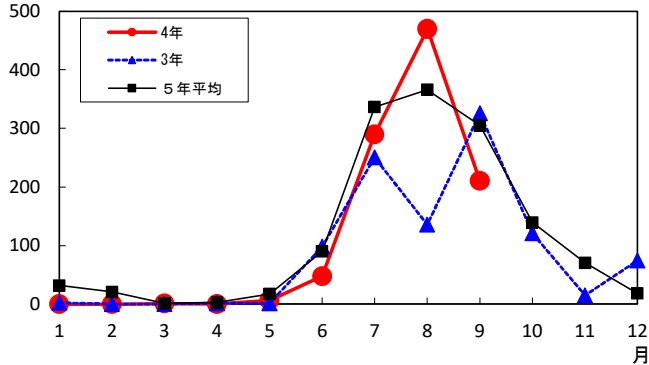


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

トン ウルメイワシ月別漁獲量



トン ウルメイワシ4半期別漁獲量

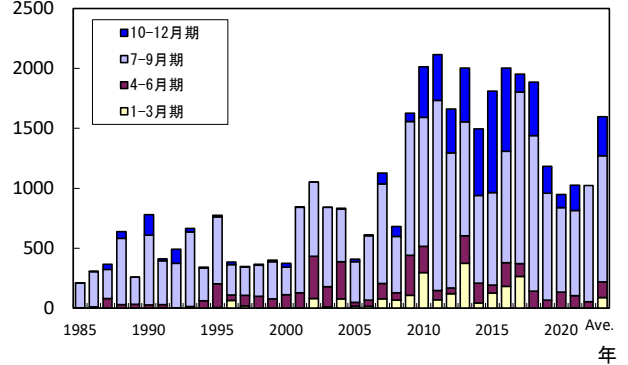
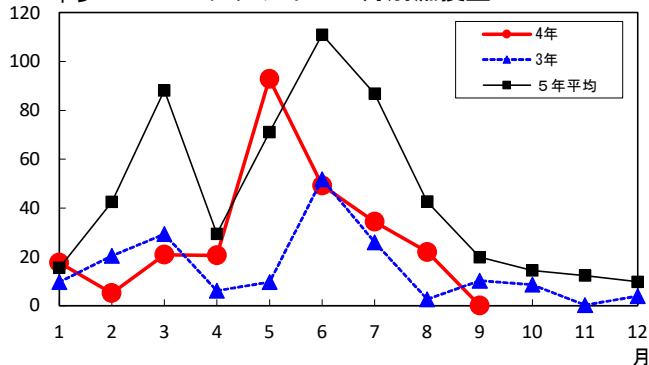


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

トン カタクチイワシ月別漁獲量



トン カタクチイワシ4半期別漁獲量

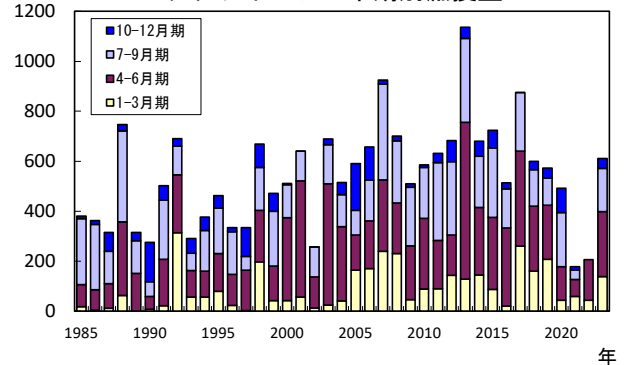


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和4(2022)年9月28日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（ムロアジ、クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉
 県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、1990年の21,700トンピークに急減し、1994年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、2021年は3,017トンとなりました。

4港計のまき網では、島間沖、屋久島南、宇治、湯瀬でクサヤモロ中小主体の漁場が形成されました。期全体で140トンの水揚げで、前年の46%及び平年の56%でした。

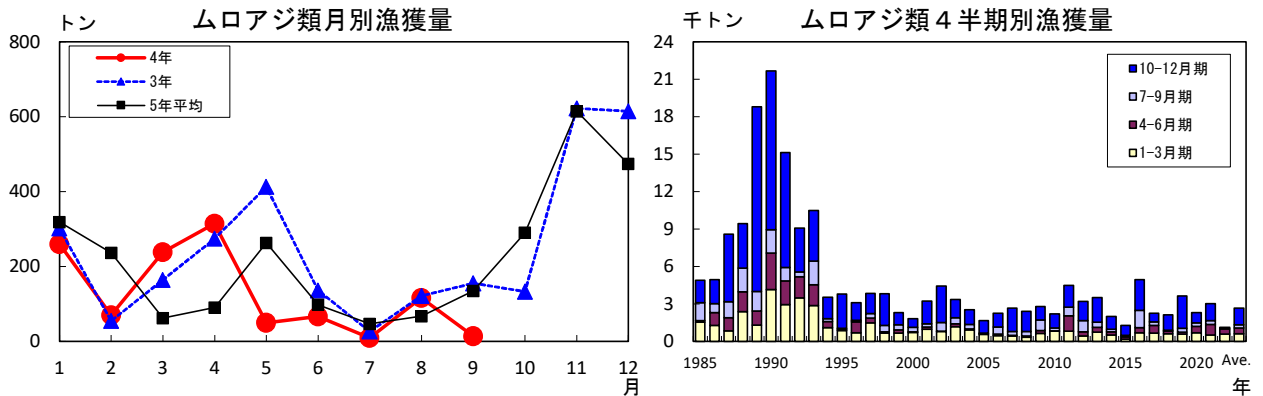


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年9月28日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、1989年の5,300トンピークに一旦減少し、1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。2008年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、2021年は416トンとなりました。

4港計のまき網では、主に屋久島南でオアカムロ中主体の漁場が形成されました。期全体で72.4トンの水揚げで、前年の45%及び平年の45%でした。

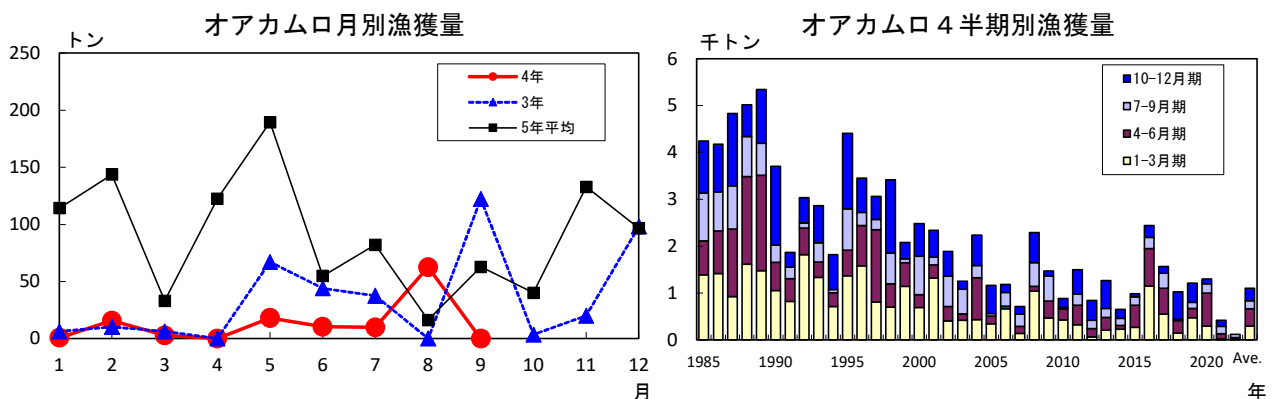


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年9月28日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和4（2022）年7～9月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、1987年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000年から2003年に再度ピークを迎え2003年には3,150トンと最高を記録しましたが、2004年以降は低調に推移し、2021年は176トンとなりました。

4港計のまき網では、串木野沖、甌東でマルアジ中、小主体の漁場が形成されました。期全体で45トンの水揚げで、前年の343%及び平年の87%でした。

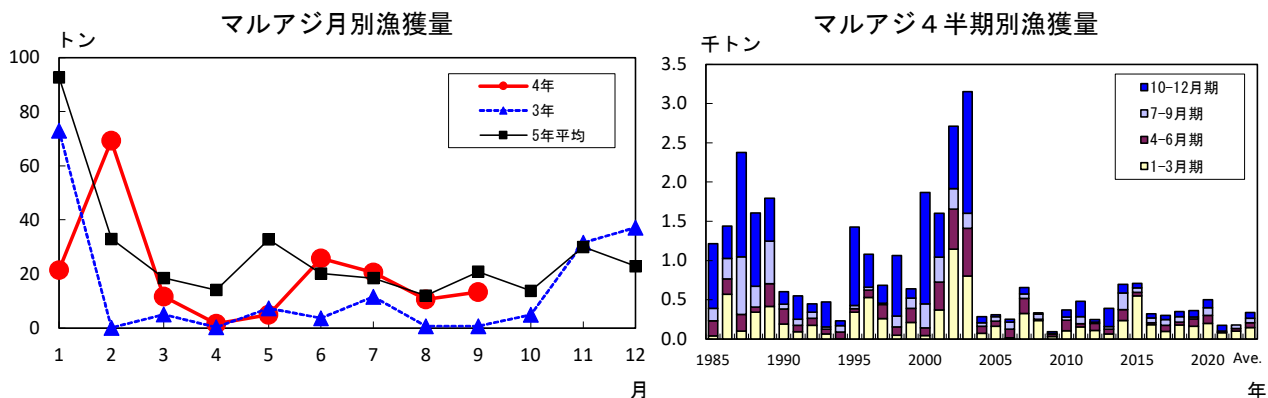


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和4（2022）年9月28日までの水揚げ量を使用